

群 教 セ	I01 - 01
	平20.240集

通常の学級に在籍する特別な支援が必要な児童への学習指導の在り方

— 個別の指導計画を基にした授業づくりの工夫を通して —

長期研修Ⅰ 研修員 金子三代子

《研究の概要》

本研究は、県内小・中学校の通常の学級に在籍している特別な支援が必要な児童生徒への具体的な支援の状況について調査・分析を行い、通常の学級における特別支援教育の実践と推進上の課題を把握した。この結果から、協力校において個別の指導計画を活用した授業実践に取り組み、検証を通して通常の学級に在籍する特別な支援が必要な児童への学習指導の在り方の提言を行う。

キーワード 【特別支援教育 個別の指導計画 特別な支援が必要な児童】

Ⅰ 調査研究の背景と目的

1 現状と課題

平成19年4月より特別支援教育が全面実施されて今年度で2年目となる。

文部科学省の特別支援教育体制整備状況調査結果（H20.3.25）によると、「公立小・中学校においては、『校内委員会の設置』『特別支援教育コーディネーターの指名』といった基礎的な支援体制はほぼ整備されており、今後は『個別の指導計画の作成』『個別の教育支援計画の策定』など、障害のある児童生徒一人一人に対する一層の支援の充実が課題となっている」と述べ、特別な支援が必要な児童生徒への計画的な支援が求められている。

県内の各小・中学校においても、校内委員会の設置や特別支援教育コーディネーターの指名がなされ、特別支援教育が推進されている。「個別の指導計画の作成」状況においては小学校が59.6%、中学校が55.1%（平成19年度の文部科学省資料より）であり、本県は全国平均に比べると小学校が7.9%、中学校が0.7%落ち込んでいる。

学校現場の指導方法を見ると、小・中学校共に特別支援教育コーディネーターを中心に、指導事例の紹介や具体的な指導方法の研修会を開いたり、個別の指導計画を作成したりして特別支援教育体制の整備の充実に努めてきている。このような状況がある反面、一人一人の児童生徒の教育的ニーズが的確に把握されていないため具体的な支援の方法が手探りの状態であったり、個別の指導計画を作成したとしても実際に授業に活用されていないなど課題が山積している。

これを受けて、まず、県内小・中学校の通常の学級に在籍する特別な支援が必要な児童生徒への取組の調査を行い、これまでの取組における具体的な支援の状況について集約し分析することにした。県内の実態を把握し、工夫されている点は生かし広げるとともに、課題となっている点の解決策を、協力校での実践を通して探りたいと考える。協力校での実践では、特別な支援が必要な児童への支援の充実を図るために、個別の目標や指導方法などを盛り込んだ個別の指導計画の作成・活用を通して計画的な手だてを投入し、授業改善を進めることによって特別な支援が必要な児童への学習指導の在り方を明らかにしていく。

このように、調査結果を分析しながら、協力校の特別な支援が必要な児童の実態を把握し、必要とする手だてを計画的に投入して授業実践をすることは、特別な支援が必要な児童が少しでも分かった、できたという達成感や成就感を味わうことができ、生き生きと学習に取り組む姿を引き出すことができるであろうと考え、本主題を設定した。

2 調査研究の目的

通常の学級に在籍する特別な支援が必要な児童生徒への取組の調査結果をもとに、協力校における特別な支援が必要な児童への個別の指導計画を基にした授業づくりの工夫を通して、学習指導の在り方を明らかにする。

Ⅱ 調査研究の内容

1 調査研究の基本的な考え方

(1) 通常の学級に在籍する特別な支援が必要な

児童生徒への取組の調査を通して、県内の小・中学校における具体的な支援の状況や課題を明らかにする。

(2) 調査結果をもとに、協力校の特別な支援が必要な児童に対してきめ細かな指導が行えるよう、個別の指導計画の作成・活用を通して授業改善を進める。

(3) 課題解決のための有効な方策を、計画的な支援を継続的に行う実践を通して探り明らかにする。

2 調査の方法

(1) 内容

自記式（直接記入式）質問調査により、県内小・中学校の通常の学級に在籍する特別な支援が必要な児童生徒に対する一斉授業での支援の状況や個別の指導計画の作成・活用にかかわる課題を把握する。

(2) 対象

県内の全公立小・中学校の約2割（小学校73校、中学校32校）を対象にアンケート調査を実施する。小・中学校共に各学年の通常学級の担任1名を対象とする。地域が偏らないように教育委員会を指定し、学校規模を考慮して選定してもらう。

Ⅲ 調査の実施

1 調査項目とデータの処理方針

(1) 通常の学級に在籍する特別な支援が必要な児童生徒への具体的な支援の状況や課題について調査する。調査項目は資料1のとおりとする。（なお、回答については障害の診断の有無にかかわらず、担任が必要性を認める児童生徒を想定し、記入してもらう。）

(2) データの処理については、小・中学校のデータを各調査項目の選択肢の割合別に比較・分析する。

2 データの処理と分析

(1) 具体的な支援の状況や課題についての調査結果と分析

① 一斉授業において、特別な支援が必要な児童生徒の特性に配慮した分かりやすい工夫について

通常の学級における教科等の一斉授業において、特別な支援が必要な児童生徒の特性に配慮して、分かりやすい工夫をしているかという質問項

目について、小・中学校共に「いつもしている」「時々している」を合わせた回答が全体の9割以上になっていることが分かった。

「していない」という回答の理由の中で多かったのは、小・中学校共に「特に工夫や配慮の必要性を感じていないから」であった。

② 分かりやすい授業の具体的な工夫について

分かりやすい授業を行うための具体的な工夫や配慮については、小・中学校共に「意図的な机間指導を設け、個別の支援をしている」が2割強で最も多く、次いで「注意を引きつけてから指示を出す」「説明や指示は、具体的な言葉ではっきりと伝える」であった。他に、小学校では「実物やカード・図表など、視覚的な教材を取り入れるようにしている」（14%）、中学校では「子ども同士が教え合う学習活動を設定している」（12%）の回答が多かった。

小・中学校共に、少し工夫をすればきめ細かな指導につながる指導方法が上位を占めていることが分かった。

③ 一斉授業を進める上での難しさについて

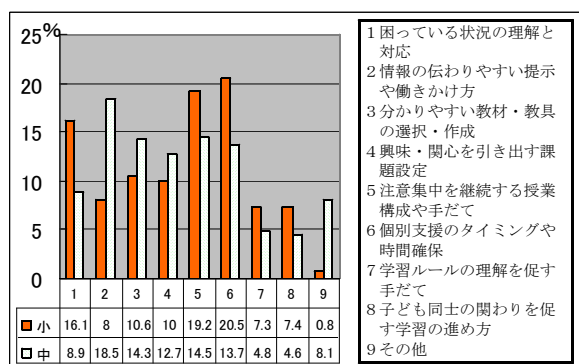


図1 一斉授業を進める上での難しさ

図1のように、特別な支援が必要な児童生徒の特性に配慮して、一斉授業を進める上での難しさをどこに感じているかという質問では、小学校と中学校の回答の傾向に違いが見られた。小学校で最も多いのは「個別支援のタイミングや時間確保」（21%）で、中学校では「情報の伝わりやすい提示の仕方や働きかけ方」（19%）であった。2位は共に「注意集中を継続する授業構成や手だて」であった。

一斉授業を進める上で、小学校は「困っている状況の理解と対応」（16%）の数値がやや高いので、児童が困っている状況を意識しつつも、何を、いつ、どのように行ったらよいか悩んでいること

が伺える。中学校は「困っている状況の理解と対応」（8.9％）が低い。しかし、具体的な手だてを見出すことが難しいという点では小学校と同じである。

（2）特別な支援が必要な児童生徒の個別の指導計画の作成について

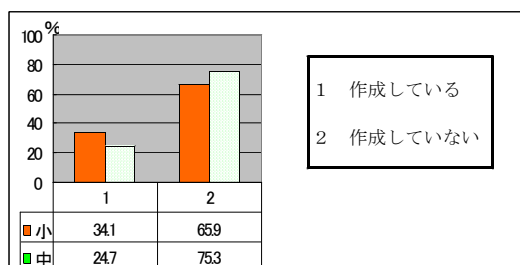


図2 個別の指導計画の作成状況

個別の指導計画の作成状況は図2からも分かるように小・中学校共におよそ3割であった。

（平成19年度の文科省の調査では、県内の個別の指導計画の作成状況は約5割であった。文科省の調査が学校単位であったのに対し、本調査は学年単位で行ったので作成率が下がったものと思われる。）

① 個別の指導計画を作成・活用する上での課題

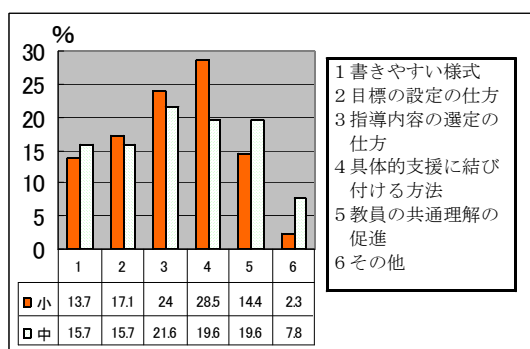


図3 個別の指導計画作成・活用上の課題

図3のように、小学校は「個別の指導計画を継続的な具体的支援に結びつける方法」（29％）が、中学校は「目標を達成するために必要な指導内容の選定の仕方」（16％）が最も多かった。

② 個別の指導計画を作成していない理由について

図4のように、個別の指導計画を作成していない理由では、小・中学校共に「どのような実態の児童生徒に個別の指導計画を用意したらよいか分からない」（小20％、中19％以下、同様の順）

「どのような様式のものを使ったらよいか分からない」（15％、19％）、「作成方法や手順が分からない」（14％、13％）という回答が多かった。

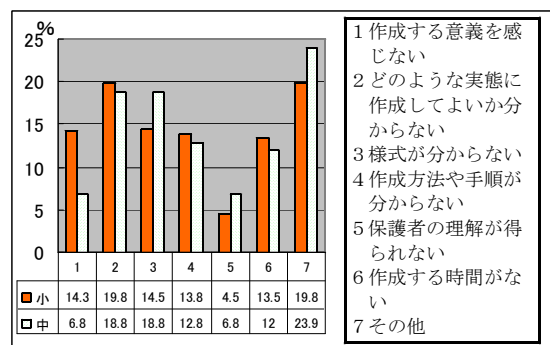


図4 作成していない理由の内訳

ここでは、個別の指導計画の様式や作成方法がよく分からないという傾向が見受けられる。また、「書く量が多くて作成する時間がない」（13.5％、12％）という回答もあり、多忙な現場の教師の率直な声が上がってきている。

「その他」（20％、24％）についての内訳を挙げると、「個別に指導して対応している」「作成するほどの児童ではない」「作成する時間がない」「対象児童が多すぎて対応しきれない」「学校全体で共通理解が図られていない」「作成を検討している」という回答であった。

IV 調査結果を生かした教育実践

1 実践の基本的な考え方

（1）調査結果の考察

① 通常の学級における教科などの一斉指導の中で、特別な支援が必要な児童生徒への分かりやすい工夫については、多くの教師が意図的に取り組む姿勢が見られた。しかし、一斉授業を進める上での難しさは、図1から「個別支援のタイミングや時間確保」「注意集中を継続する授業構成や手だて」「情報の伝わりやすい提示の仕方や働きかけ方」など、小・中学校共に個別の支援方法を導き出すことに課題を感じている。これは、特別な支援が必要な児童生徒の特性やつまづきなどの実態がつかめていないからではないかと考える。

② 個別の指導計画の作成が、3割という低い数値になっている。学校現場の現状を考えると作成する意義は感じていても、作成・検討する時間がないということであろう。しかし、①の個別の

支援方法を導き出すことについての課題は、個別の指導計画の作成率の低さが原因の一つであると考えられる。目の前で困っている児童生徒に対してどんな支援をしたらよいか場当たりの対処方法ではなく、児童生徒の実態に即した指導目標や指導方法などを導き出し、授業における分かりやすい工夫へとつなげる必要があると考える。

③ 上記①②から、特別な支援が必要な児童生徒の特性やつまずきなどの実態を把握し、授業において分かりやすい工夫を行う必要がある。その時に、指導担当が随時変わる教科担任制の中学校よりも、いろいろな教科などを担任が指導する小学校の方が、複数の教科などで困っている状況が見られる児童にも対応しやすいと考える。そこで、本研究の実践は小学校で行うことにした。

(2) 計画的な支援の投入

分かりやすい授業を行うためのキーワードは、『実態把握・目標設定・支援方法』の三つであるにとらえた。これらを組み立て計画的に授業づくりを行うことで、児童は意欲的に授業に取り組むことができるであろうと考えた。

計画的な支援を行うためには、まず実態把握の結果からどういうことをめざすか（目標）について方向性を定め、続いて、その目標を達成するための具体的な支援の計画を練る必要がある。そして、いよいよ実際に児童を前にした指導となる。この一連の内容を記載し、計画的に指導・支援を提供するツールが個別の指導計画である。

(3) 個別の指導計画の作成・活用上の工夫

調査結果から得られた課題を踏まえて、個別の指導計画の様式と活用について工夫する必要があると考える。

① 個別の指導計画の様式について

① 個別の指導計画の様式について

「どのような様式のものを使ったらよいか分からない」（14.5％）の回答に対しては、簡単で分かりやすいA4版一枚の分量に仕上げたいと考えた。これは、「書く量が多くて作成する時間がない」（14％）という回答に対しても応えるものであると考えるからである。

② 個別の指導計画の活用について

「個別の指導計画を継続的な具体的支援に結びつける方法」（28.5％）「目標を達成するために必要な指導内容の選定の仕方」（24％）の回答に対しては、個別の指導計画の内容を教科別の指導にどのように反映させるか、その方法を具体化していく必要があると考えた。（個別の指導計画の様式については資料2を参照）

2 実践の概要

協力校で対象児に個別の指導計画を作成し、国語科・体育科における授業実践を行った。

実践の方法としては、まず、個別の指導計画における学習面の支援の方法から各教科（本研究は国語科・体育科）の領域別における実態と支援方法を考えた。次に、これを受けて単元の指導方針を作成し、具体的な支援内容を導き出した。

授業においては、毎時間の評価を行う段階で支援に課題が見られた場合は、その都度、個別の指導計画や領域別の支援方法などに立ち返りながら、具体的な手だての修正・追加を行い授業の改善を図った。（図6）

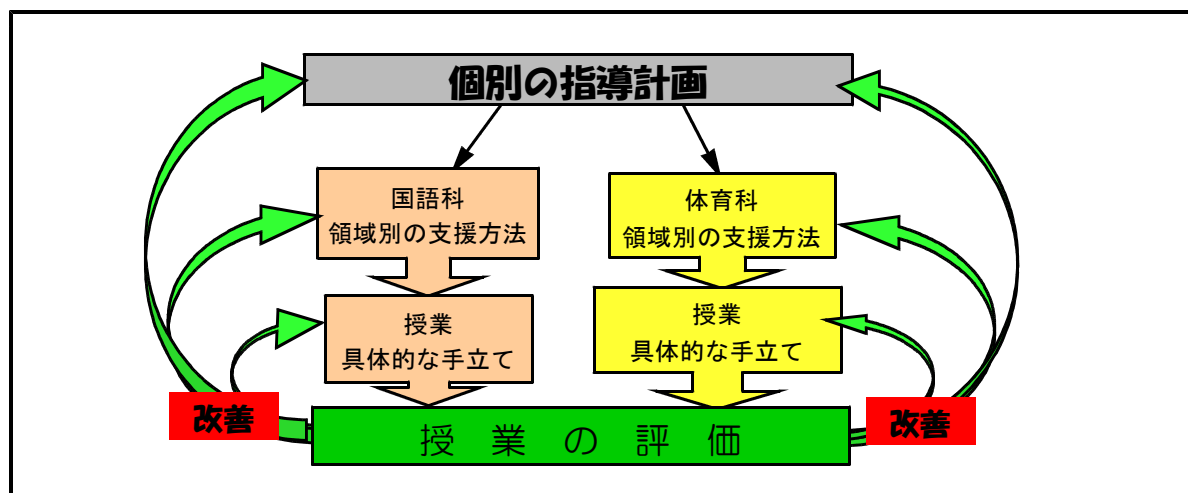


図6 個別の指導計画を授業に活用するまで

(1) 個別の指導計画を基にした授業づくり

個別の指導計画を基にして、国語科・体育科の各領域における支援方法を導き出した。記号はその関連を表している。(記号「国①-1」は個別の指導計画の支援の方法①を受けた、国語科における具体的支援であることを示す。)

個別の指導計画（一部抜粋）

長期目標	(略)
短期目標	(略)
学 習 面 の 実 態	支 援 の 方 法
(略)	①指示や説明は短くはっきりと伝える。 ②話しかける前に注意を引きつけて、話をする人の方へ耳を傾かせる。さらに個別の指示を行う。 ③掲示はカードや絵・写真を活用し工夫する。 ④興味をもち続けられるような授業の流れを工夫する。 ⑤興味・関心のある課題を取り入れる。 ⑥ルールや手順は分かりやすく伝える。

個別の指導計画を受けて

国語科の領域別の支援方法

領域	実 態	支 援
話す 聞く	(略)	・大事なことを落とさないように、指示を視覚的に分かるようなカードで示したり要点を短くはっきり伝えたりする。 国①-1 国②-1 国③-1
書く	(略)	・作文では、文章を書きやすくする絵やワークシートを用意して、見たこと聞いたことを基に書くことができるようにする。 国③-2 国④-1 ・感想文では、必要な項立てを示したカードなどを提示して、感じたことや考えたことなども書けるようにする。 国③-3 国④-2
読む	(略)	・心情的な面の把握や文章の要約などでは、場面にそった挿絵やキーワードとなる文字カードを提示したり、動作化を取り入れたりして読みの理解を深め広めていくようにする。 国①-2 国②-2 国③-4 国⑤-1
言語 事項	(略)	(他の児童と同様)

体育科の領域別の支援方法

領域	実 態	支 援
体力 つく り運 動	(略)	・（一人で行う運動は他の児童と同様） ・きまりを守ったり、安全に気を付けて用具を扱ったりできるように、約束事を明記した掲示板などを用意しておく。 体①-1 体③-1 体⑥-1
器 械 運動 走・ 跳の 運動	(略)	
浮く ・泳 ぐ運 動	(略)	
ゲー ム	(略)	・技能を高める集団プレイのトレーニングを取り入れ、集団で運動する楽しさを味わえるようにする。 体④-1 体⑥-2 ・ゲームのルールやお互いを認め合うような約束事を、グループの話し合いを通して伝えるようにする。 体②-1 体④-2 体⑥-3
表現 運動	(略)	・表現運動の練習では表現の内容を短く切った練習の方法を取り入れるようにする。 体①-2 体⑥-4
保健	(略)	・視覚教材（絵や映像）や体験活動を取り入れて興味・関心をもたせるようにする。 体③-2

(2) 国語科単元Aにおける授業 *国①-2などの記号は個別の指導計画及び国語科の支援方法との関連を示す

目標	◎キーワードに着目して登場人物の様子や気持ちを想像しながら読む。		
指導方針 (○は対象児に対して ●は学級全体に対して)	○指示が伝わりやすいように、指示は短く、肯定的な表現で行うようにする。曖昧な指示は避けるが、場合によっては細かい指示や説明も考えられるので、その時はイメージしやすい形(例えば簡単な文字や絵など)で伝える。 国①-2 国②-3 国③-2 ○注意集中の継続を促すために、1時間の学習の見通しがもてるように学習の簡単な流れを毎時間掲示しておく。また、覚えておく必要のある説明や課題は、文字カードに掲示して確認できるような工夫を行う。 国③-2 ○場面ごとの登場人物の気持ちや情景を読み深められるように、以下のような3種類のワークシートを用意して児童に自由に選択させる。 国⑤-2 (黄ワークシート) 登場人物の気持ちを吹き出しに書き込む。 (青ワークシート) ヒントを参考にして登場人物の気持ちを吹き出しに書き込む。 (赤ワークシート) 登場人物の気持ちが書いてある選択肢を選び、吹き出しに書き込む。 ●毎時間の学習の取組はどうだったか「ふりかえり」の時間を設定し、自己評価していく。評価することで目標をもって読み進めることができたり、次時の読みの学習に生かせたりできるようにしていく。 ●場面の様子や登場人物の心情を想像しながら、大きな声で読むところ、ゆっくり読むところ、間を空けて読むところ、気持ちを込めて読むところなど、読みの目当てをもつことで読み取りを深めていくようにする。 ●食べ物や町の様子に着目することで、生活の厳しさを感じ取れるようにする。 ●両親のまさ子への気持ちがよく分かるところを見つけることによって、両親の愛情の深さを想像しながら読み深められるようにする。 ●登場人物への手紙を書くことで、作品への感想をもたせ、評価に生かす。		
対象児の手だて	方法 指示・説明の出し方の工夫 国①-2 内容 ○注意を引きつけて、短く分かりやすい言葉で話す。 ○話の内容が推測できるように、最初にタイトルを伝える。	視覚的な手がかりの提示の工夫 国②-3 ○授業の目当てや流れを板書したり文字カードで示したりする。 ○キーワードとなる場面や文を文字・絵カードで示す。	興味を引き出すワークシートの工夫 国⑤-2 ○3種類のワークシート【(黄)吹き出しのみ(青)ヒントの提示(赤)選択肢の設定】から、自分に合ったものを選ぶ。

① 授業全体について

本児は、その場の雰囲気や察したり人の気持ちを考えたりすることが苦手である。そのため、文学作品のような『人物の気持ちを想像して表現する』という学習は苦手である。しかし、本児は読書を好み、文字から読み取ったものを映像としてイメージしストーリーを伝えられる。このよさを生かし、本単元では、興味を持続させるための視覚的な教材と、人物の気持ちを想像させるためのキーワード探しに焦点を当て「中心を押さえて読む」ことに重点を置いた。

② 指示・説明の出し方の工夫 (国①-2)

単元の第1時から、本児はゲームのキャラクターの絵を描き続けたりしていたので、何度か名前を呼んで学習への集中を促した。45分間、全てに集中させることは難しいので、特に中心となる場面でタイミングを図り、本児に学習に関する簡単な質問をしたり挿絵を提示したりすることで注意

集中を促そうと考えた。

『母親の気持ちを考える』場面では、下を向いて文具をいじっていた本児に「おやつは何が好きかな?」と、意図的に指名し教師の方へ注意を向けさせ、好きなおやつを発表させた。そのまま、他の児童が発表しているおやつも聞き入っていたので、興味を持続させるために黒板におやつ絵カードを貼った。視覚的に比較させながら厳しい食生活の中で、我が子を思う母親の気持ちの読み取りに進むことができた。

耳からの情報がスムーズに入りにくい本児のために、最も大事な場面では教師の方に注意を引きつけてから説明を行った。説明を行う前に「これから今日の学習のまとめについて話します。」と、本児を見て教師の方へ注意を引きつけてから、「今日は三つのことを考えましたね。一つは〇〇と、二つは〇〇と…このことからお母さんの気持ちが考えられましたね。」と、聞くことへの見通しを

もたせてから話すと、教師の方へ体を向けて最後まで聞くことができた。

③ 視覚的な手がかりの提示 〈国②-3〉

聞くことより見ることで理解が促される本児のために、視覚的に分かるような絵や文字カードを随所に取り入れた。黒板には授業の目当てや授業の流れをカード化して掲示したり、音読や言葉探しのときは「○時△分まで」と色のチョークで板書したりして視覚的に分かりやすくした。

登場人物の気持ちを想像する学習のときは、ここで、文章を平坦に読むのではなく登場人物の気持ちを理解するために必要なキーワードを押さえることにした。

『妹の気持ちを読み取る』場面では、文字カード「妹の様子が分かるところに線を引く」と掲示した後、カードに指し示しながら「妹の様子が分かるところがあります。五つあります。」と興味を引きつけ、丸を五つ板書して「そこに線を引いてください。」と短く指示を投げかけた。本児は、五つという数に反応して直ぐにその様子を探し始めた。五つ全部に線を引いた後は、積極的に挙手して発表まですることができた。五つのキーワードをカード化して掲示したため、気持ちをとらえる課題もスムーズに取り組むことができた。

④ 興味を引き出すワークシートの工夫 〈国⑤-2〉

登場人物の気持ちを想像して表現するために、「黄」「青」「赤」の三種類のワークシートを活用した。毎時間自分の書きやすいワークシートを選ぶという方法を取った結果、第1時では、本児は「赤」の選択肢のあるワークシートを選び、2分程で仕上げ残りはキャラクターの絵を描いていた。その後、無記入のワークシートもあったが、『登場人物の気持ちを想像して書く』学習では、「黄」の吹き出しだけのワークシートを選んだ。「黄」のワークシートには思いつきの内容もあったので、一つ一つ文を区切って大事な言葉に着目させて気持ちをとらえられるようにすると、2回目からは登場人物の気持ちを想像して書き込むことができていた。

『父親とまさ子の気持ち』の読み取りでは、いつものように、「二人が幸せになったなと思う文に線を全部引く」と文字カードを掲示すると、本児は全部というところで少し首をかしげたが見守った。それは、キーワードとなる言葉や文章を探せるようになってきたために、ねらいに合った文章に線も引けると確信していたからである。

その後の発表のときでも、意図的に指名を行わず数人の児童を指名すると、不服そうな顔で教師のところへ来て「なんで、指してくれないの？」と訴えた。この言葉から本児の達成感を読み取ることができた。

⑤ 授業結果の考察

○ たくさんの指示を聞き取ることが難しい本児であるが、意欲が持続し大事な説明は最後まで聞く姿が見られるようになった。それは、注意集中をさせるタイミングを図り、簡単な質問や挿絵を交えながら指示・説明を行ったために、興味が持続し意欲を喚起させることができたと考ええる。

○ 登場人物の様子や気持ちなどの読み取りが苦手であったが、集中力が高まり登場人物の心情を考え出すことができた。それは、キーワード探しのときに言葉だけの指示では理解しにくいので、絵や文字カードを掲示して視覚的な手がかりを取り入れたために、理解を深めることができたと考ええる。

○ 人の気持ちを察することが苦手な本児であるが、叙述を基に想像して読み取りを行うことができた。それは、想像して読む場面で三種類のワークシートを用意してそれを自分で選択できるようにしたことで、興味が高まり意欲がもて、結果として読みの理解の深まりにつながったと考ええる。

(3) 体育科における授業 * 体①-1などの記号は個別の指導計画及び体育科の支援方法との関連を示す

目標	◎規則を守り、互いに協力してゲームを行い、勝敗を素直に認めることができるようにする。		
指導方針 (○は対象児に対して ●は学級全体に対して)	○ゲームのルールや指示が伝わりやすいように、ホワイトボードを使って説明の迫体験や復唱をするようにする。 体①-1 体③-1 体⑥-1		
	○基礎的なドリブルやパスの習得では、ゲーム型スキルトレーニングを取り入れ、楽しみながら技能を高めるようにする。 体④-1 体⑥-1		
対象児の手だて	○作戦タイムのときは、攻守の動きやルールの確認ができ、作戦がスムーズに進むような「作戦カード」を取り入れる。 体②-1 体④-2 体⑥-2		
	○ゲームに参加することが難しいと予想される本児に配慮して、授業で活躍できるように審判・計時・得点係などの役割を用意する。 体⑥-3		
方法	○ゲームの苦手な本児が積極的に参加できたり、ゲームの攻守やルールなどが分かったりするために、前半のゲームはハーフコートで行う。 体④-2 体⑥-3		
	●毎時間の学習の取組はどうだったか、「ふりかえり」の時間を設定し自己評価していく。評価することで見通しをもって次時の学習に生かしていくようにする。		
内容	●学習計画の1・2時間目では、ステップが楽しくできるように風船ゲームを取り入れる。		
	●ルールの工夫の話合いがスムーズにできるよう、教師からもいくつかルールを例示する。		
方法	●ゲームのグループ編成は、運動能力や人間関係を考慮できるよう教師と体育係が行う。		
	興味を持続させるための教材の工夫 体④-1 体⑥-1	ルール理解のためのスモールステップ化の工夫 体③-1 体④-1	手順が分かり見通しがもてる学習の工夫 体②-1 体④-2 体⑥-2
内容	○下記の三つのゲーム型スキルトレーニングを取り入れる。【ドリブル合戦・チームで風船蹴りゲーム・ドリブル鬼ごっこ】	○試合に入る前に、攻守やルールなどを体得するための前段階として、ハーフコートでゲームを行う。 ○ゲームのルールを、児童たちが一つずつ考え追加していくようにする。	○ゲームがスムーズに進むように、手順や見通しを「作戦カード」に記入して、グループごとに話し合う時間を設ける。

① 授業全体について

個人競技である陸上や水泳は目標に向かって取り組むことができるが、集団競技は難しい。そこで、体を動かすことは好きであり、指示されたことはやろうとするよさを生かす授業づくりを行った。ゲームは、基礎的な技能はもちろんのこと、集団プレイとルールの意識化が大切になるので、本児の苦手な領域である「ルールの徹底」「チームの団結・協力・技術の向上（以後「チーム力」と称する）」という2点に焦点を当て授業展開を行った。

② 興味を持続させるための教材の工夫

〈体④-1 体⑥-1〉

ドリブル合戦とドリブル鬼ごっこは、集団で楽しくゲームをしながら、ドリブルの技能が上達することをねらったゲーム型スキルトレーニングである。前者は自分のボールをドリブルしながら友

達のボールをコート外に出していくという、緊張感をもちながらドリブルを続ける方法で、後者は鬼に捕まらないようにドリブルしながら逃げるという方法である。どちらも本児は、興味・関心をもって積極的に取り組む姿が見られた。

風船蹴りゲームは、チーム力を高めるトレーニングとして試みた。チームが円になって一つの風船を1分間で何回蹴れるかというゲームである（下に落ちたら最初からやり直し）。本児のチームは、最初は本児が自分だけが蹴りたがっていたため、チームがバラバラになり7回しか蹴れず最下位という結果だった。2回目は、チーム力を高めるために話し合いを行わせたところ、一人が2回蹴り続けてはいけないというルールを出してきた。その後、3回目で、本児のチームは一人一人がルールを守り協力して動き回っていた。本児のチームは18回蹴ることができて、5グループ中の

2位になることができた。

③ ルール理解のためのスモールステップ化

〈体③-1 体④-1〉

ルールを体得するためにスモールステップ化を図った。ハーフコートで攻め・守りのゲームを5分交代で行い、攻守の動きを理解させたいというねらいがあった。ゲームを行うときのルールも分かりやすくするために、少ないルールから開始しようと考えた。教師側で用意した最初のルールは、二つだけにした。

ルールの体得が苦手な本児であったが、二つだけのルールのため意識してプレイを行っていた。しかし、ボールを仲の良い友達やボール運動が得意な友達だけに渡してためめに、グループのメンバーからクレームが出た。少し不満そうな顔をして下を向いた。

その後、目立たない児童や運動が好きではない児童にも活躍させたいと思い、チームごとにルールを考えさせた。本児はいつも自分でゴールしたがっていたが、「女の子がゴールしたら2点」というルールが決まると、本児は女の子にもパスをする姿が見られた。みんなで決めたルールだったので受け入れられたのだと感じた。その後も、毎時間一つずつルールを付け加えていくような方法をとったので、混乱がなくスムーズにゲームが行われた。

④ 手順が分かり見通しがもてる学習の工夫

〈体②-1 体④-2 体⑥-2〉

毎時間、ゲームを始める前にゲームの手順や見通しについて「作戦カード」に書き込み、グループごとに話し合う時間（以降「作戦タイム」と称する）を設けた。

作戦タイムでは、前時のゲームの反省をさせたり、本時の目標とポジション・ルールの手順や見通しを書いた作戦カードを基に話し合わせたりした。この作戦タイムで「いつもボールを持ちすぎるため、はやくパスを出すように。」とチームの仲間から指摘があったが、本児は素直に納得していた。第6時の話し合いでは、点を取ることに意欲を燃やしていた本児が、守りを意識したポジションをやってみたいと要求を出していた。

最後に本児が「世界選手権に出たら世界のひとと友達になれるね。」と、笑顔で伝えてくれた言葉がとても印象的であった。

⑤ 授業結果の考察

○ 集団で行うゲームは、友達とうまくかかわる

ことのできないことが多かったが、今回はチームの友達と楽しくゲームを行うことができた。それは、チーム力を高めるために遊び感覚のゲーム型スキルトレーニングを取り入れたり、作戦カードを活用した作戦タイムを設けたりしたことで、ルールの必要性やチームの大切さを体得できたからであると考ええる。

○ ゲームのルールに関係なく行動することが多かった本児だが、決めたルールを守っていこうという姿が見られた。それは、ゲームの基本であるポジションやルールを理解させるために、ハーフコートでの練習からフルコートでのゲームにつなげたり、自分たちで一つずつルールを決めて追加するなどのスモールステップ化を図ったりしたことが効果的であったと考える。

V 調査研究のまとめ

本研究では、調査結果から得られた課題を踏まえ、協力校において特別な支援が必要な児童の個別の指導計画を作成し、それを基にした授業づくりに取り組んだ。以下に個別の指導計画の作成及びその活用方法における成果と課題について述べる。

1 個別の指導計画の作成について

調査結果からは、個別の支援方法をどうやって導き出すかという課題があった。これを受けて、対象児の個別の指導計画を作成したところ、対象児のものの見方やとらえ方の特性及び困っている状況を的確に把握することができ、指導・支援の方向性を明確にすることができた。作成には、対象児の様子を見ながら随時修正を行ったことを含めると、多くの時間を要したが、その分精度の高い内容にすることができた。

また、個別の指導計画の様式、作成方法や手順などにおける課題に対してこたえるべく、本研究で作成した個別の指導計画の様式を資料2に示したので参照いただきたい。

2 個別の指導計画を基にした授業づくりについて

調査結果からは、個別の指導計画を具体的な支援に結びつける方法に課題があった。個別の指導計画における支援の方法は、一年間の方向性を示すものであり、授業ですぐに活用するには難しさがある。そこで、個別の指導計画における支援の方法を基にして、教科（国語科・体育科）の領域

毎に対象児の実態と支援方法を導き出した。このことにより、教科の特性と対象児の実態を踏まえた、授業における具体的な手だてを比較的容易に導き出すことができた。また、これらの手だてを講じたことで、対象児の望ましい変容が見られたことから、手だて自体も適切であったと考える。

本研究で導き出した授業における具体的な手だては、以下のようである。

ア 指示・説明の仕方の工夫

イ 視覚的な手がかりの提示の工夫

ウ 興味を持続させるための教材の工夫

エ 指導内容のスモールステップ化の工夫

オ 手順が分かり見通しをもちやすい流れの工夫

個別の指導計画を基に授業づくりを行う上で、学級全体の実態との関連を考慮することが不可欠であった。例えば、「支援の方法」を考える場合、教室環境や教材・教具の選択、さらに児童同士のかかわりまでも幅広く吟味・検討する必要が出てきた。ア～オで挙げた手だては本児にとって必要な手だてであったが、他の児童にとってはとても便利な手だてであることを実感した。

個別の指導計画を基にした授業づくりは、学級全体の相乗効果をもたらす結果にもつながった。

3 検証を通しての提言

- 個別の指導計画を作成すると、対象児のもののとらえ方などの特性や困っている状況を的確に把握することができ、指導・支援の方向性を明確にすることができる。
- 個別の指導計画における支援の方法を基にして、教科の領域毎に対象児の実態と支援方法を導き出すと、教科の特性と対象児の実態を踏まえた、授業における具体的な手だてを比較的容易かつ適切に導き出すことができる。
- このような個別の指導計画の活用方法は、授業における対象児の達成感や成就感につながると同時に学級全体にも相乗効果が見られる。

4 今後の課題

- 特別な支援が必要な児童に対して、個別の指導計画を基にした授業づくりは様々な面で効果が見られた。今後は、障害特性の異なる児童においても、個別の指導計画を基にした授業づく

りを行い、検証していくことが必要であると考ええる。

- 本研究は国語と体育の授業づくりであったが各教科の単元の評価方法を、年間指導計画の欄に書き込むスペースを作り記すことで、単元の特徴を踏まえた対象児のつまずきの傾向や、具体的な指導方法がより明確になるだろうと考える。

<参考文献>

- ・海津 亜希子 著 『個別の指導計画作成ハンドブック』 日本文化科学社（2007）
- ・廣瀬 由美子、佐藤 克敏 編著 『通常の学級担任がつくる個別の指導計画』 東洋館出版社（2006）
- ・小島 道生、宇野 宏幸、井澤 信三 編著 『授業・学級経営の工夫』 明治図書（2008）